

文学教材の授業実践研究 ——漱石文学に焦点を当てて

植西 浩一 教授 (UENISHI, KOICHI 人文学部・日本文化学科)

漱石文学の奥深さを、歴史的パースペクティブの観点から教室で〈リアル〉に解き明かす

植西研究室では、高等学校の国語教材として長く読まれてきた『こころ』をはじめとする文豪・夏目漱石の文学作品をテキストとして、中学・高等学校での実施を想定した授業実践の方法及び内容を検討しながら、作品の妥当な解釈に根差した文学教材の指導の在り方について研究しています。

2016年は、大正5(1916)

年に50歳で亡くなった漱石の没後100周年に、2017年は、漱石が慶応3(1867)年に誕生してから150年という節目の年にあたります。この間、漱石に関する講演会が多数開催された他、記念出版物の刊行や記念館の創設等、漱石文学の人気の高さをうかがわせるイベントが、各地で実施されました。

学校教育に眼を転じますと、例えば漱石の代表作である『こころ』を教材として扱う場合、内容や人物についての妥当な解釈を促すための前段階として、

作品の時代背景や当時の知識人ならではの苦悩を理解することが必要となります。一方で、どこにでもいる善良な人間が〈悪〉になり得るという人間の根本的な問題から、友情とは、

愛とは何かといった問題も問いかけています。『こころ』等の漱石文学は、〈今〉を生きる生

徒たちが〈リアル〉に考え、受け入れることのできるテーマを数多く内包しているのです。

その一方で、近年の漱石文学の研究成果は、作品から直接読み取れる文脈や作品の主題からやや乖離したものとなっている印象があります。基盤的解釈が定まらない中で、中学・高等学校の授業においては、内容理解を生徒個々人の読解にゆだねるケースも生じています。このままですと、放任主義による恣意的(しいてき)な読みが、世の中に溢れかねないのです。

文学研究と国語科授業実践研究の往還により、漱石文学の享受のあるべき姿と、次世代への継承について考える



受託研究のススメ

植西研究室では、企業の皆様とコラボした研究活動として、例えば次のようなご要望にお応えすることができま

す。まずはご相談ください。

「漱石文学の特色をわかりやすく伝えることのできる教育プログラムを構築してもらいたい。」

「国語科教員のレベルアップを目的とした、漱石文学を題材とするアクティブラーニングを企画したい。」

「中国など海外でも人気のある漱石作品をはじめとした日本文学作品の関連商品を企画開発して、国内外で販売したい。」

「文学作品をテキストに用いた日本語教育プログラムを開発したい。」